

---

# ひかりの海

四方祐樹

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ひかりの海

### 【Nコード】

N6684B

### 【作者名】

四方祐樹

### 【あらすじ】

高校一年の夏休み。佑夜は家族との本当の絆に気づくこととなった。襲ってきた『絶望』と『希望』によって。

## ひかりの海

ジリジリと夏の陽光が世界を照らしつけていた。

うるさいからとリビングにある窓すべてをぴっちり閉めたのに、  
レールとの隙間を縫って蝉の合唱は今なお聞こえてくる。

真夏特有の嫌な倦怠感が、身体の中で渦巻き始めてきた。

さらには極めつけとばかりに、アブラゼミがミンミンゼミが、一  
様に声を張り上げだす。

エアコンの効いた部屋にいてさえも、その熱気が伝わってくるよ  
うで正直辛い。

あー……。と覇気のない声をあげると、佑夜ゆいは思わず手にしたシ  
ヤーペンを投げ出した。

手足からすべての力を抜き、椅子の背に寄りかかりながら深い息  
を吐き出す。

ため息と共に佑夜は瞼を伏せる。

閉ざされた視覚の分、蝉の鳴き声はより鮮明に耳を突いていった。

今は夏休みもまだまだ序盤。

世間では甲子園出場を懸けて、各地区の高校球児たちが熱き戦い  
を繰り広げている。

そんな最中の平凡な昼間。佑夜もまた、別の静かなる熱戦を繰り  
広げているのだ。

というのもこの世の中の学生には、二つの派閥がある。

『宿題は早めに終わらせる派』と『宿題はギリギリまで残す派』の  
ことだ。

佑夜の場合は紛れもなくこの前者。

邪魔なものはさっさと終わらせて、後半はのんびりと過ごそうと  
いう寸法だ。

だがその前に待つのは限りない地獄。

つい今しがた『漢字プリント』という強敵を射止めたが、だからといってそれが何になろう。

腱鞘炎になりそうなるほど頑張ったところで、夏休みの魔物はなかなか成敗できない。

何が休みだ。何が長期休暇だ。

夏休みなんて名目だけの牢獄じゃないか。

休暇とか見せかけておいて、世の中はまったくもって人に優しくないのだ。

放り出した数学のプリントに両肘をつき、手の甲に顎を寄せた。

グシャツと実に不快は音が、肘のすぐ下で聞こえてくる。

コロンと転がる筆記具をよそに、佑夜はひたすらに外を眺め続けていた。

雪井佑夜。

それは本名であつて、けれど佑夜にとっては本名ではなかった。今となつては誰にも言わない、そして誰からも言われることのない消え去つた存在。

柳瀬佑夜。

それが佑夜の、実の本名だ。

というのも佑夜は幼い頃に養子として、この雪井家の一員となつた。

養子になる数日前に、両親は事故に遭つて死んだらしい。

らしいというのは、佑夜自身そのことについての定かな記憶がないからだ。

ただ後から聞かされた話によれば、記者だった両親は仕事で船に乗つて、嵐による高波に飲まれて船もろとも沈没したという。

太平洋の、ずっとずっと沖のほうだ。

両親が見つかったのは、ある夏の日。場所はすでに日本の領ではなかった。

佑夜にしてみればまだ物心がやつとついた頃で、両親との記憶というものは言つてしまえばほとんど残っていない。

だからその分、両親の死というものを受け入れられていないというのもまた事実。

だつて自分の両親は、この雪井家の二人だと信じて疑わなかったのだから……。

それでも佑夜は年に一度、没した場所までいくのだ。

他の遺族たちと、船に乗つて。

記憶なんてほとんどない。解っている。

けれど実の両親は本当に自分のことを愛してくれていたんだ。

今の両親が話してくれた時に、一緒に写真も渡してくれた。

それは普通に比べれば少ない量だったのかもしれない。けどその中には確かに愛されていた記憶が鮮明に写されていて……。

だから記憶にない両親への、できる限りの孝行をしたかった。

真の両親にもらった分の愛情を、それ以上の愛情を伝えるために。

そして今年も、その時期が徐々に近づいてきた。

夏休みも序盤の、あの時期が。

力尽きそうな気がした。

見るからに半端ない量の宿題が、まだ眼前に聳え立っている。

中学の頃はこの半分くらいだったな、宿題の量……。

読書感想文がないからって浮かれすぎただろうか。と心中で毒づきながら、テーブルに突っ伏したまま一番上にあるプリントを手にとった。

『英語科 夏休みの課題一覧・期初めテスト出題範囲』

ポップ体の可愛い文字で書かれているのは、先生の趣味だろうか。

でも当たり前の如く、内容は一向に可愛さを見せてくれない。

授業でしていない単元のノートまとめなど、ある種のいじめにさえ感じてしまう。

加えて両面刷りの問題演習プリント類がわさわさ……。

佑夜はため息をつく、元あった場所へとプリントを戻した。

これ本当に、終わるのか？

「佑夜、起きてる？」

すると背後で、買い物袋のかさばった音が耳についた。

「起きてるよ、一応ね」

「じゃあ勉強に手がつかない？ って聞いた方がよかったかな」

「まあね」

兄である将斗まはてはダイニングキッチンまで行くと、笑いながら冷蔵庫に買ってきたものを詰め込み始めた。

勿論兄とはいつても、実際の兄ではない。佑夜からすれば義兄だ。

「つか、買い物だったら行ってきたのに」

「俺が行こうと思った時、佑夜うたた寝状態だったじゃん。数学と見つめ合って」

「うわー、ロマンチックじゃねえ」

「逆にロマンを感じたら、兄として引くよ。どん引き」

野菜室の戸を閉めすくつと立ち上がると、将斗は腕を思い切り振り下ろした。

振り下ろした腕からは、なにやら小さな塊が佑夜に向かって思いつきり飛んでくる。

反射的に手を眼前に翳すと、確かな感触が掌に触れた。

「格闘するくらいなら買ってこいってんだ」

あー、すつきりした。と呟く将斗の声と共に、佑夜は手中のものを確かめる。

「……消しゴム……」

なるほど、格闘とはそういうことだったのか。

確かに最近、やたらと小さな消しゴムと内乱を勃発していたかもしれない。

「けどさ、兄貴。……平気だったのかよ」

「平気じゃなかったら、今頃くたばってるっつもの」

「そりゃそうだけどさ」

前の椅子に腰掛けた将斗を見ながら、佑夜は消しゴムをテーブルの上に置いた。

「あんま無茶すんなって。明後日だろ、検査」

置きっぱなしにしていたプリントを手にしたまま、将斗は一瞬動きを止める。

ただその一瞬がやけに長く感じて、佑夜は罪悪感に似た何かを苦々と感じていた。

蝉の声が、世界から消え去っていく。

「ま、ドンマイ！」

心配させないせいか、空気を読み取ったせいか。

将斗は普段と変わらぬ明るい声でそう言つと、笑顔のままに宿題を突きつけてきた。

佑夜はそれを、普段と同じようにふるまって受け取る。

ひかりの海

動き出した世界は同じようで、  
何かが変わった。

兄である将斗は、重い病気を抱えていた。

先天性の心臓疾患と、それによる合併症。

早ければ乳児検診までには見つかるらしいのだが、将斗の疾患と合併症が発見されたのは中学一年、十二歳にまで成長していた。

確かにそれまでも異常があったのだが、なかなか発見されなかつたらしい。

発見が遅れたがために、合併症まで引き起こしていたのだ。

それにこの疾患は、十歳以前に手術をしないと生存率も通常より低くなる。加えてこんな合併症まで引き起こしていればなおさらだ。

本当なら今すぐにも手術しなければならぬというのが、その手術に耐え切れるほどの体力が、すでに将斗にはなかった。

手術をしなければ、死は着実に近づいてくる。

けれど手術をすれば将斗の身体が持たないかもしれない。

どちらにせよ迫ってくる死への恐怖は、将斗にとって相当大きなものだった。

そして病名を知ったその日を境に、周囲からの対応さえも変わってしまったのだ。

今までできたことも、一気にできなくなってしまった。

日に日に病状は悪化の一途を辿るばかり。

それは将斗にとって、酷い負担になっていた。

高校進学の時もそうだ。

膨らむ心配からか、養護学校に行けと両親に告げられた。

公立高校前期選抜出願の、直前のことだった。

将斗は考える間もなく、両親の進めを押し切っていた。

本当は解っていたんだ。自らの身体がどういう状況なのかも。

けれどこれ以上人とは違うということを、内心では認めたくな

った。

普通がかけ離れたものだと、思い知らされたくなかった。

……それでも人とは違う生活であることに変わりない。

病気だと解ってからは、今まで好きだった体育もできなくなった。急な動悸は日を追うことに回数を増し、しゃべることもままならない。

人と同じままでいたいという意志とは裏腹に、無情にも病状は悪化していく。

おかげで何度も入退院を繰り返した。

それがどれほどの悔しさを、将斗にあたえただろう。

もう普通の生活を送れないと、どれだけ思い知らされただろう。

極めつけには医師から聞かされた、余命宣告。

『非常に言いにくいだが、君は衰弱しきつている。このままだと、二十歳までは生きられないかもしれない』

今までは四十以前だと聞いていた。勿論そのことに変わりはない。けれど二十歳といたら、あとわずか三年ぽっちしかないのだ。

多くてあと、三年ちよつと。

いきなり縮まった余命宣告に、どうすれば耐えられよう。

両親も先生も、今まで以上に気を使うようになった。

余命までは知らないとはいえ、友人たちも気遣う部分が見えてきた。

明日死ぬかもしれない運命。

その中で見つけた唯一の場所は、他ならぬ弟だった。

誰よりも普通に接してくれる佑夜だけが、唯一安らげる場所だった。

「阿呆？」

真面目に佑夜やいゆの顔を覗きこみながら、将斗まはとはぼろつと呟いた。

「何でここにルートがあるわけ？ 外したんでしょ、根号」

「いや……そのつもりだったんだけどさあ」

「有理化って言葉を知っていますか、佑夜さん？」

いきなり他人行儀になった将斗の言葉に、佑夜は苦笑を浮かべた。

「なんでいきなり敬語なんですか？ お兄さん」

「点取る場所で間違えるなんて、信じられなかったからですけど」

平然と呟く言葉に、佑夜は正直ギクツとした。

さすがは勉強ができるだけあって、将斗の言葉は鋭い。核心を突いてくる。

乾いた笑みを洩らすと、抗議もできないのでしかたなく解き直しを始めた。

今度は教えてもらいながらのせいか、やけにすんなりと答えに導かれる。

これが一人の力でできればいいんだがな……と思うと、ちょっとばかり涙が込み上げてくる思いだった。

数学が苦手だと、先が思いやられる。

「理解よろしくて？」

「あー……、多分大丈夫なんじゃないかと思われます」

「そう。じゃあ昼飯作るけど、何にする？」

もうそんな時間なのか。

驚いて顔を上げれば、その先で時計はもう十二時を指そうとしていた。

休日は無駄に時間が過ぎるのが早いものだと、佑夜は舌打ちする。  
「んじゃあくスクスで」

「ほう、想定外だなこりゃ。じゃあ今からお前が材料自腹で買ってきてよ。ついでに料理本もな。なにせ初めての試みだからなあ。味の保証もないし、アフリカの料理だって聞くし。俺正直」  
「嘘です、ごめんなさい。冷やし中華がいいです」  
あまりにまくし立てるもんだから、根負けした佑夜は身を小さくした。

だったら端から言うなと意地悪い笑みを浮かべると、将斗はキッチンへと向かっていく。

そこにはすでに、冷やし中華をする気満々の材料が並べられていた。

なんだかまんまと嵌められたような気がして、面白くない。

『やられた』という言葉が、佑夜の中に蓄積されていく。

「で、佑夜。そういえば追悼式っていつだっけ」

野菜を切る小刻みな音と共に、将斗は口を開く。

不貞腐れていた佑夜は瞬間に意味を捉えると、脳内から記憶を引きずり出した。

そうか。もう出発まで間がないんだっけ。

確か追悼式は

「明後日の早朝だったと思う」

「じゃあ明日の晩には出るんだ」

「まあ船に乗ったら沖に出なきゃだしね、しかたないんじゃないかね？」

明るくふるまっても、自然投げやりに聞こえてしまう。

内容が重いからしょうがないとは思うものの、なんだか気分は晴れなかった。

「だろうな。まあせいぜい乗り過ぎすなよ」

それでも将斗は何も言わずに接してくれる。

普段どおりの受け答えに、佑夜はどこか救われたような気がした。

「せいぜい頑張りますよ」

態度には出すことはできなかった。

けれどそんな兄の優しさに、佑夜は心中で感謝した。

ひかりの海

ただ一言『ありがとう』と。

自分は人と違う。

そんなことに気付いたのは、図々しくも小学校に上がったからだ。  
った。

周囲の大人からの言葉に、何か不安を感じる。

自分は一体何なんだろう。

疑問から佑夜<sup>やいゆ</sup>は、両親に何度も聞いた。

「僕とお兄ちゃん、似てる？」

似てるわけなんてないんだ。血の繋がりがまったくないんだから。  
それなのに困る親をよそに聞き続けた。

僕たち、そっくり？

親が折れたのは、それから三年後のこと。

似ていないなど言われ慣れてしまい、佑夜もそんなことなど気にも留めなくなつた頃だった。

その日の佑夜は、国語の漢字テストで一番をとって浮かれていた。  
お父さんにもお母さんにも、お兄ちゃんにも自慢するんだ。

そんな思いを胸に秘め、軽い足取りで家路を辿つたのだ。

勿論家に帰って、すぐには言わなかった。

今は母親しかいない。

父は仕事でいつも帰りが六時を過ぎている。

それにこの頃将斗<sup>まこと</sup>はまだ元気で、サッカー部に所属していた。そのため帰りは遅かつたのだ。

どうせならみんなのいるところで言いたい。ビックリさせたい。

そんな幼い考えがあったから、言つのを我慢したのだ。

その日は将斗よりも早く、父親が帰ってきた。

勿論佑夜は言うのを我慢した。

しかしすぐに両親に呼ばれたのだ。

表情に出ていたのかな？ だったら言っちゃうか。

飛び跳ねるように軽い足取りのまま、佑夜は両親のいるリビングに赴いた。

けれどそこにいる両親は、少しも明るい表情など見せていない。

無理して張り付けた笑顔が妙に痛々しかったのを、佑夜は覚えて  
いる。

何かがおかしいと悟ったのは、その時になってからだった。

静まり返った室内。佑夜は一歩いっば両親に近づいていく。

そして不意に、一冊のアルバムを渡された。

そこには今まで見せてもらえなかった一歳前の自分と、大人の男  
女と女の子がいた。

この日を境に、家族の関係は本当に断ち切られた。

佑夜の信じて疑わなかった家族は、自分と繋がりのない人たちだ  
ったから。

花屋に行こう。

そう言い出したのは、将斗まはこだった。

今晚出るんだろ。

だったらお勧めがあるから、花屋に行くぞ。

坂道を登りきったところに花屋はあった。

小さな店だが、近づけば近づくほど花の甘いにおいがかはつきりしてくる。

けれど男二人で買い物なんて、すげえ惨めだよな。

そう言ったら将斗にツッコまれた。

「ガーベラとマーガレットを間違えるような奴に、一人で花が買えるんですか？」

「尤もな意見に、これ以上の口出しができなくなる。

大人しく将斗の後につくと、二人は花屋へと入っていった。

店内に一度入れば、色とりどりの花が所狭しと並べられている。

普段は花屋なんて入ることもないから、見るものすべてが物珍しい。

まるで絵本の中にも飛び込んだみたいだ。

そんな思いに浸りながら、佑夜ゆいはきよきよと辺りを見渡していた。

それにしても本当、花ばっかり。

「あ、……これ」

すると不意に視線が定まった。

見つめた先一点にあるその花は、やめに見覚えがある気がしたのだ。

けれど一体、どこでこんな花を目にしたんだろう。

ひたと立ち止まると、佑夜はまじまじとその花を見始めた。花は少し厚みのありそうな黄色の花弁を幾枚も散りばめている。中心には紅花のような雄しべ雌しべがあつて、どこか神秘的な美しさをしていた。

何かに、似ている。

もう喉の奥まで出かかっている単語にじれったさを感じた。だからといって、すぐにそれが出てくるはずもない。

頭を捻らせながら、佑夜は小さく言葉を吐いた。

「……これ、ちっさいひまわり？」

「馬鹿も休み休み言え。どう見たつてガーベラだろ」

しかしすぐに飛んできたのは、将斗の嘲笑と訂正の言葉だった。

振り返れば確かに、嘲笑つた風の将斗が『バーカ』と唇だけで呟いて立っている。

激しく視線で罵倒されてから、佑夜はもう一度ガーベラの花を見た。

嘘だ。前に見た時、ガーベラは白だったはずだ。

黄色のガーベラって何？ 突然変異か？ それとも食紅をぶっかけて……

数学と花にはとことん弱い頭を働かせて、佑夜は尽きない疑問に突っ込んでいった。

だがすぐにそれも限界が訪れ、佑夜はくわつと振り返る。

「ガーベラって白だったじゃん！」

「白だけなわけねーだろ、このタコ！ ちつとは学べ！」

さすがに呆れた将斗は、佑夜の背中を軽く蹴飛ばした。

今だ頭の整理がつかない佑夜はガーベラを前にして、そういえばバケツの中には黄色以外にもサーモンピンクやオレンジなどの色があることに気付いた。

そこには苦々しい思い出を持つ、あの白いガーベラもある。

平然と咲き誇っている白のガーベラに、佑夜は鼻で笑われたような気がした。

「ちつくしょう、コイツ。前にもマーガレットみたいな面していやがって……ッ」

「勝手に間違えたんだろう、お前が」

どこまでも冷静な将斗は、もう一度佑夜の背中を蹴飛ばすと早く来いと促す。

正論だけに反抗もできなくて、佑夜は渋々将斗の後をついていった。

そして向かった先には、濃いオレンジ色の……

「これがお勧めなんですか、お兄さん」

「そうさ、我が弟。これがお勧めの花ですよ」

そう言つと将斗はその花を五本手に持った。

茎が細く、その上部、左右交互に蕾がついている。花は下から順に咲いていて、今は三分咲きと言つたところか。

そんな奇妙な花とカスミソウ、それからスイートピーを幾本選ぶと、そのまま有無も聞かずに将斗はレジへと直行していった。

一人で花に囲まれているのもなんだか嫌で、佑夜は外へと足を向ける。

足元にはガーベラが並んでいた。

店の外で待つっていると、すぐに将斗は戻ってきた。

手には先ほど選んだ花々が咲き誇っている。

突っ立ってないで帰るぞと言つ将斗に、佑夜は早速疑問を投げつけた。

「で、兄貴。そのオレンジの花、何？」

「モントブレチア」

「モント……リオール？」

「いっぺん死ぬ」

あまりの即答と引き攣った笑顔に、佑夜は思わず頭を下げた。

「それで、そのモント何とかって何なわけ？」

「だからモントブレチアつつってんだろ」

頭大丈夫ですか？ と佑夜の頭を一度引つ叩く。

痛いと呼ぶ佑夜を他所に、将斗は一つ長い息を吐き出すと、落ち着いた表情へと戻っていった。

「モントブレチア。南アフリカ原産だけど、日本でも野生化しつつある球根植物。で、その花言葉は……『すてきな思い出』」  
静かな住宅街。

一筋風が駆け抜けていく中、二人の歩みは止まっていた。  
ゆっくりと佑夜は隣を見る。

そこには普段は見せない真剣な顔をした将斗が立っていた。

「兄貴……」

「家族との思い出、あるんだろ」

無言で頷く。

そんな佑夜を見た将斗は、嬉しそうに顔をほころばせた。

「だったらそれ持っていけ。思い出は人生の必需品だからな」

すると将斗は佑夜に買ってきたばかりの花束を押し付けた。

僅かながらではあるが、花の香りがふわりと鼻腔をくすぐっている。  
く。

どこか優しい香りだ。

すると「さあ、帰ろう。突っ立っていないで帰ろう」と言う将斗の  
声が聞こえてくる。

視線を前にやれば、将斗は先にずんずん歩き出してしまっていた。  
すてきな、思い出か……。

嬉しさを胸に抱きながら、佑夜は将斗の背を追いかけていった。

あの立派な、兄の背を。

だが、突然目の前から将斗の姿が消える。

「え……」

視線を下ろすとそこには、蹲った将斗の姿が痛々しく転がっていた。  
た。

時は確かに、動きを止めた。

ひかりの海

発作だった。それも今回は今までにないほど、大きな。

一命を取り留めたとはいえ、今だ意識は回復していない。

心電図や呼吸器に繋がられている将斗まはこの体調は、最早最悪な状態だった。

手術ができないから投薬で持ちこたえさせている。だが、果たしてそれがいつまで通用するのか……。

主治医が下した診断は、誰もを絶望させるのに十分な威力を持っていた。

「この状態から脱せなければ、せいぜいあと一ヶ月か、良くて」話を聞いた母は、泣き崩れていた。父は信じまいと必死でもがいていた。

そんな二人を見ているのが嫌で、現実を突きつけられるのが何よりも嫌で。

佑夜ゆうやは静かに小会議室を後にした。

覚束ない足取りで向かったのは、将斗の病室だった。

廊下にはもう月光が射していた。

それだけの時間が経っていた。

そしてそれが指す意味も、誰もが解っていた。

病状が安定するまでに、今までこれほどかかったことはなかった。

つまり、そういうこと。

下唇を噛み締めると、佑夜は歩調を速める。

蒼闇の廊下は、どこか物悲しげだった。

病室には将斗以外、誰もいなかった。

電気も今は、消してある。

暗がりのそこにはまるで生活感など微塵もなく、佑夜は怖気を覚

えた。

まるで将斗がこのままだと、そう言われているような気がしたから。

静かに扉を閉め、足音を殺しながら歩み寄る。

無機質な心電図の音は近づくに比例して、どんどんはつきりと聞こえてきた。

それが将斗の生きている、唯一の証だったから。

佑夜は隣まで来ると、そっと将斗の顔を覗き見る。

倒れる前まで蹴飛ばしたり笑ったりしていたとは到底思えない、そんな風貌だった。

顔色は白く、繰り返される呼吸もか細い。

そして将斗をこんなにしてしまったのは、他でもない自分だ。

そう思うとどうしようもない罪悪感が、佑夜の中に渦巻いた。

左胸の奥が、ツンと痛んだ。

「何、泣いてんだよ、お前。……柄でもねえ」

「兄貴……」

「グズは女に、もてねえぞ」

酷くか細い声で、将斗は佑夜をおちよくった。

その時初めて、自分の臉が湿っていることに気付く。

虚無感、底知れない苦しさは、人の感情まで麻痺させてしまうのだろうか。

ただ呆然と佑夜はその場に立ち尽くす。

その時将斗は苦しそうな顔を無理して笑顔にして、へへっと笑った。

佑夜を元氣付けるために、将斗は笑ってくれていたのだ。

それなのに、どうしてこんなに泣きたくなるのだろうか……。

己の無力さに打ちひしがれて、佑夜は唇を噛み締めて俯いた。

「……夜か。俺、どんなけ寝てたんだろ」

静寂の中、ゆっくりと将斗は呟いた。

窓の外へと視線を投げかけながら、言いようのない翳りを見せて

いて。

半日くらいと答えた佑夜の言葉に、そりゃ長かったなと言いつた。

「でも、まだ今日なんだ」

そう言つと将斗は、星空ではないところをじつと見つめだした。それが一体どこなのか、皆目見当がつかない。

同じ物が見えるはずもない。そう解っているのに、佑夜もじつと窓の外を見つめた。

そこにはやっぱり、瞬く幾千の星しか目に付かなかった。

「そういえば佑夜。追悼式、どうした」

ふと思いつ出した将斗は、続かぬ息を懸命に吐き出しながら佑夜に視線を向けた。

そこに宿る光の弱々しさに、佑夜は思わず息を呑む。

頭の中は、一気に現実へと引き戻されたような感じがした。

「……行かない。行けるわけがない」

兄をこんなにしておいて、どうすればのうのうと別の場所へと行けよう。

本当の家族だつて、かけがえのない存在には変わらない。

けれど今、この病床で戦っている家族を他所にどこかへ行くなんで、そんな大それた度胸を佑夜は持ちえていなかった。

両親には悪いけど、今年だけは……。

佑夜はすまなさに再度俯くと、ぐつと掌を握りしめた。

将斗はそんな佑夜を目にして、そう、と目を伏せる。

静かな病室。

蒼闇に包み込まれた密室。

これほど近くにいるのに、互いに言葉を発することができなかつた。

本当は伝えたいことだつてあるだろうに、口にできない。

このままじゃいけない。解っていた。

だったら、どうに伝えよう。

「なあ、佑夜」

重たい腕を、必死で持ち上げる。

すると力のない佑夜の手を、将斗は弱々しく握った。

「いいか、俺が言うこと……ちゃんと聞けよ」

消え入りそうな、吐息ほどの声量で将斗は言う。

けれどその瞳は強い光を宿していて、たまらず佑夜は頷いた。

すると将斗は嬉しそうに頬を緩ませる。

「今すぐだ。お前一人でも、追悼式に行つてこい」

突然の言葉に、佑夜は目を見開いた。

けれどすぐに冷静な頭が制止に出、ほとんど無意識のまま頭を振る。

「いい。俺のせいで兄貴がこんな目にあってるのに、どこかへなんか行けない」

「佑夜。何で、お前のせいになるんだよ」

「だって兄貴が体調悪いの知っていたんだ。俺が行くのを止めていれば、苦しい思いなんてしなくて済んだじゃないか」

俺が悪かつたんだよ。

そう言った瞬間、掴まれた手に力が籠った。

「お前、ほんとただのバカだな。そのおつむで、よく俺と同じ高校に受かつたよ」

込められた力は、あまりにも小さかった。

「ここで行かないなんて、それこそ苦しんだ価値ねえじゃん。お前、それを解つて言つてんのか」

途切れ途切れの呼気。

小さくなる一方の声量。

それでも将斗の言葉には、それらに勝る衝撃があった。

「行つてこい。お前はお前の家族のことだけ、今は考えてりゃいいんだ」

他のことは帰ってきてからじっくり考える。

そう言つと将斗は手を放して、

「すてきな思い出持つて、さっさと行け」

その手でトンと、佑夜の背中を押しやった。

振り返つた時、将斗の泣きそうな笑顔が暗がりに見えた気がした。

もうすぐ九時になろうとしていた。

病院のロビーにある時計が、そう時間を知らせていた。

佑夜は走って病院を後にした。

追悼式の集合時間は、今晚十時。

ここから家に帰って花を持って、港へ行くには短すぎる時間だ。

けれど諦めようとは思わなかった。

いや、違う。諦めちゃいけなかったんだ。

腕を振りたくり、バカみたいに走りながら佑夜は思い出した。

あの将斗の、泣きそうな笑顔を。

今までどんなことがあっても、将斗の弱い部分なんて見たことがなかった。

そんな将斗が、あれだけの表情を浮かべたのだ。

口調からは感じ取れないほどの、微かな弱さ。

それを思い出せば思い出すほど、今回の追悼式は絶対に出席しなければいけないように思う。

勝手な解釈だが、将斗は悲しんでいたのだと佑夜は感じていた。

真の両親に会わないと言った、佑夜の言葉に。

そしてそこには、将斗が倒れたからというのもあるのだ。

自分が倒れたから、佑夜は両親のところへ行かないと言う。

そのことに少なからず責任と悲しみを感じていたんじゃないだろうか。

だから強がる言葉の裏で、あんな悲しそうな表情を浮かべていたんじゃないだろうか。

疑問は尽きない。

けれど結局は兄弟して、自分に責任を感じていたということだ。なんてことだろう。

なんて洒落にもならないことだろう。

佑夜は奥歯を噛み締めた。

途端脳裏にはやはり、あの笑顔が浮かんでくる。

根拠はない。

けれど今回ばかりは何かが違った。

この追悼式が何かもつと、特別なもののような気がしたのだ。

間に合え、間に合え。間に合ってくれ

取り戻せない時間に懇願しながら、佑夜は夜道を駆けていった。

時間は刻一刻と過ぎ去っていく。

そこだけがまるで、別世界のようなだった。  
十時といえば人気のなくなるこの港に、今は大勢の人が集まっている。

対岸にある観覧船乗り場とは、わけが違うのだ。

煌びやかでもない。歓喜の声があるわけでもない。

ただ静かにひっそりと、そこにあり続けるだけなのだ。

中学の時によく友人と夜釣りに来たから、あの静けさははっきりと覚えている。

まるで境界線でも引かれたかのように、世界が変わって見えるのだ。

河が終わり、海の始まるこの場所は。

とはいえ今が対岸のように煌びやかかといえば、そうではない。

人はいる。けれど何よりも深い悲しみを帯びている。

話し声はあっても、自然盛り上がりはしない。

どう足掻いたところで、ここにいてすべての人があの事故の遺族なんだ。

息を切らして船に乗り込んだ佑夜ゆうやは、ふとそんな当たり前のことを思った。

そして、こんなことを考えている佑夜自身も

花束を飾る包装紙が、くしゃっと力ない悲鳴をあげた。

今だ落ち着かない呼吸のまま、佑夜は鉄柵に寄りかかり、甲板に腰を下ろした。

身体を下ろすと同時に、シャツは捲りあがる。

その間を風は駆けて行き、汗をかいた背中がひんやりとした。

悲しいざわめきが、耳を掠めていく。

急に孤独感に駆られ、佑夜はその場で背中を丸めた。

船は河の終わりを抜け出ていく。

どれほどの時間が過ぎたのかなんて、そんなこと解らなかった。港の明かりは、もうずっと遠くの方で沈んでいる。

飲み込まれんばかりの大海原が、黒くそこに広がり続けているばかりだった。

佑夜は依然甲板に座り続けたままで、モーター音と掻き分ける波の音ばかりに意識を集中させていた。

そのせいか時間の感覚も、自分自身の感覚も。

何もかもが麻痺でもしたかのような感覚に陥っていた。

後どれくらい、沖に出るのだろうか。

モーター音に満たされた頭で、そんなことを考えた。

考えはすぐにモーター音に掻き消された。

「こんばんは」

すると突然、目の前に少女が現れる。

身よりはいないのか、彼女一人だ。

顔は正直、可愛い系とはいえない。どちらかといえば凜々しい方。クラスではまとめ役でもしていそうな、そんなタイプのように感じた。

現に声は凜と通って、はっきりしている。

佑夜は慌てて起き上がると、こんばんはと小声で答えた。

急に立ち上がったせいか、立った瞬間少しよろけた。

「あなた一人なの？」

「そうだけど」

「へえ、奇遇だね。私も一人」

そう言うと少女は優しいような微笑を浮かべた。

初めて会ったとは思えない。

その笑顔を見て、佑夜はおかしなことを心の中で感じた。

それとも遺族はこの辺の人が多いから、学校が何かで会ったのだろうか。

「私、萩原梓はぎはら ずいって言うの。東高の一年」

そう言うと梓という少女は、右手をそっと差し出してきた。自己紹介をしろと、つまりはそういう意味だ。

「雪井佑夜ゆきい。同じ高校の一年」  
やっぱり学校が一緒だったか。

そんなことを頭の片隅で思いながら、佑夜も右手を差し出した。クラスメイトじゃないから、きつと廊下でもすれ違ったのだから。  
う。

「ふうん。佑夜、ね」

一方梓は、握手をしながら感慨深げに佑夜の名を口の中で転がしている。

『佑夜』なんて面白い名前でもないのに、変な奴だ。

そんなことを思いながら、佑夜は梓の顔を見つめた。

梓なんて方が、名前的にはよっぽど珍しいんじゃないのか？

ま、いい名前じゃないの。そう言いながら、梓は握手している手を放した。

握手をした後の、妙な感触が手に残る。

あまり触れ合わない人の体温。

それがなんだか、やけに生々しく掌に纏わりついている。

そういえばいつから、人との距離を置くようになったんだろう。

そんなことを思いながら、佑夜は掌をぎゅっと握った。

汗をかいていた手は、握った瞬間じつとりと嫌な感じがした。

「ねえ」

揺れる波音とうるさいモーター音。

その中で梓の凜とした声が、佑夜を読んだ。

トントンと梓は佑夜の隣まで来ると、鉄柵に捕まり暗黒の海を見つめ始める。

見つめている先は、あの時の将斗のようにまったく解らない。

けれど身を乗り出さんばかりの勢いで、梓は夜の大海原を見つめ続けていた。

夜風に揺られて、彼女のボブカットの髪が靡いている。ポーッと耳に籠るような汽笛が空気を震わす。

「佑夜つてさ、もしかして旧姓が『柳瀬』<sup>やなせ</sup>じゃない？」  
船は最初の追悼場所へとたどり着いた。

「何言つてんだよ、お前」

驚愕のあまり双眸を見開きながら、佑夜は後退った。

僅かに揺れる甲板の上。鉄柵を突き放しながら、梓は佑夜に向き直る。

「動揺するつてことは凶星？」

ふふつと聞こえる微笑。

精悍な表情に梓は淡い笑みさえ浮かべている。

そんな彼女を見て、佑夜はえも言わぬ恐怖を感じた。

確かに自分の旧姓が『柳瀬』であることは変えようのない事実だ。だが、それを何でかかわりのない同級生が知っていよう。

佑夜は生唾を一つ、飲み込んだ。

「お前……一体何なんだよ」

渴いた喉から、佑夜は声を振り絞る。

それは虚しくも潮騒がすぐに消し去って行った。

しばしの沈黙が、静かな夜を告げていく。

「言うなれば、同じ運命を辿っているってトコかな」

けれど梓は表情をまったく変えずに、少し考えてからどうとでもなさ気に言葉を紡いでいく。

そして離された分の距離を梓は無言で詰めてきた。

佑夜は鉄柵に突っかかりながらも、また一步と後退った。

まるで一定の距離以上は近づかせない、とでも言うように。

カンと甲板が寂しい声をあげた。

海上の冷たい風が、二人の間に吹き荒れる。

止まった船に当たる波は、下方で僅かな水音を立てていて。

すると鐘の代わりに、ラッパの音が夜闇を揺らし始めてきた。

すぐそこで行われている、最初の追悼。

しかしその音さえも遠く感じるほど、今の佑夜は混乱していた。わけが解らないと頭を振りたくり続ける。

首を振れば視界の端、黒い水面に白い花卉が漂っていた。

花卉は波に飲まれて、海中奥深くへと沈んでいく。

息苦しい沈黙がしんと降り積もり続けていた。

その中でどうして鼓動だけは躍り起になっているのだろうか。

嫌に荒れ狂う心音を抑えつけんばかりに佑夜は左胸を鷲掴んだ。

船は再び、籠った雄叫びを上げ始めた。

壮大な振動音の後、潮騒はすんなり消えていった。

時間はただあるがままに流れ続けていた。

あれから佑夜と梓は一言も言葉を交わすことなく、二箇所目の追悼場所を越え、三箇所目も越え　。

気が付けば残す追悼場所は、あと二箇所。

時間はもう午前の三時を指していた。

通る船もなければ、街の明かりさえもどこにもない。

もしかしたらもうすぐ、日本の国境を越えるのかもかもしれない。

妙は感覚に駆られながら、佑夜は一面の暗闇を見続けていた。

それにしても、だ。

梓の方も佑夜同様、まだ追悼場所についていないようだ。

それでも多分、次の場所が彼女の目的とする追悼場所なのだろう。

最後の追悼だけは、いつも佑夜一人なのだ。

国境を越えてしまったのは、柳瀬夫妻しかいなかったのだから…

…。

ポーッと船は、四度目の汽笛を鳴らす。

エンジン音が微かに弱まったのが、確かに感じられた。

佑夜は誰に向けるでもないため息を吐き出す。深い深いため息を。

そうしたらいきなり、将斗まはこのあの表情が浮かんできたのだ。

病室を出る際の、あの表情が。

あの時将斗は平気な振りをして、佑夜を迎えだしてくれた。けど……、本当はそんなことそしている余裕なんて、なかったはずなのだ。

悪化の一途を辿る体調。

危険な状態を脱したわけでもない。それなのに、……だ。

佑夜は手に持った花束に、ぐっと顔を近づけた。

抱え込むように、ぐっと。

花の香りは、自然と感じられない。

代わりに焦燥感にも似た後悔の念が、強く強く押し寄せてくる。

胸が潰れんばかりに、ぐっと。

佑夜は短い息を吐き出した。

どうしよう。

もう後戻りはできない。どうのしようもない。

それなのに頭の中には、そんな言葉ばかりがぐるぐると渦巻いている。

花を持つ手が震える。

……違う。震えているのは手だけじゃない。心からだ。

後悔は次第に、何よりも強い恐怖へとすり替わっていく。

震える心は、今眼前にある海にでも飲み込まれていくような錯覚さえ覚えた。

渦巻く。飲み込まれる。

係員が遺族に召集をかける声が、僅かに聞こえてきた。

「大丈夫？ 佑夜って実は船に弱いタイプなの？」

すると肩に手をかけながら、梓が心配そうに顔を覗き込んでくる。

違つと首を横に振ると、佑夜は一つ深呼吸をした。

なら良かった、と安堵の表情を梓は浮かべている。

だが佑夜の胸には大きな突っかかりが生まれる一方だった。

召集の声は、今だなりやまない。

「お前、行かなくていいのかよ」

率直な疑問を、佑夜は梓にぶつけた。

「行くつてどこに？」

しかし当の梓はとぼけたわけでもなく、ただ首を捻っているのだ。膨れ上がるばかりの疑問に、佑夜は梓の顔を見つめた。

そこには何一つ変わらない梓が、立っているだけだった。

召集の声が、今なりやむ。

梓は一度唇を引き結ぶと、ゆっくりと言の葉を紡いでいった。

「驚きだけどね、佑夜は私の兄さんだよ。双子のね」

追悼の声が、遠く聞こえる。

「私つい最近知ったんだ。自分が養子だったつんだって」

潮風が淡く通り過ぎていく。

「その時教えてもらった。自分の旧姓も、どこかで兄が暮らしてるつてことも」

そんな中で梓は、まるで物語を読むかのような口調で、真実を告げて言った。

佑夜はただ呆然と立ち尽くしながら、それをずっと聞いている。

そして梓は、一枚の写真を佑夜の前に差し出した。

そこには

「『初めて海に行つてきました。佑夜も梓も大喜びです』」

同じだ。大人の男女と一歳前の自分と女の子が、一緒に写っている。

佑夜に渡されたアルバムにあった写真と、同じだった。

鐘代わりのラッパの音が、大海原に響き渡る。

「やつと会えたね」

その中にいてさえも、梓の声は凜と聞こえてきた。

夜は徐々に明けようとしていた。

午前も四時を過ぎ、辺りは薄い明かりに包まれ始めている。

穏やかな大海原。

静か過ぎるほどの静寂。

蒼闇がぼんやりと水平線を浮かび上がらせ、暗闇から世界を形あるものへとしていった。

そして船は、最後の汽笛を高らかに鳴らしたのだった。

それは国境を越えた、青き大地でのこと。

召集の声がかかる。

名前はたったの一つだけ。

『柳瀬さんのご遺族の方』

他に国境を越えた被害者はいない。

越えたのは仕事に行っただけ帰って来なかった、あの夫妻だけ。

明ける前の海原に、もう一度召集の声が響いた。

佑夜は行くべき場所へと足を向ける。

梓の妹の手を取りながら、一歩、また一歩と。

二人は何も喋らなかつた。

そのせいか、やけに強い静寂が包み込んでくる。

カツンカツンと歩く度に鳴る甲板の音。

それが二つ、ずれて止まった。

穏やかな風の音。

優しい潮騒。

互いに並んで、両親の死した海を見つめていた。

明け方の海はどこまでも、やさしくあり続けていた。

そしてついに、鐘代わりのラッパの音が甲高く響き渡る。

「いくよ？」

小さな声。

僅かな確認。

互いに目を合わせ。

そして二人は、花束を天高く放った。

短くて、何よりもかけがえのなかった。

あのすてきな思い出とともに

今ここで家族は再会した。

両親の死した場所で、今初めて。

それは誰もが辿る道筋じゃない。

もしかしたら哀れまれる道だったのかもしれない。

けれど、これでよかったんだ。

今までとは違う。

今はみんながここにいる。

たとえそれが両親がいなかりうともだ。

身体はなくとも、心は確かにここにある。

綺麗ごとかもしれない。

けれど、それだけで十分じゃないのだろうか。

潮風が二人の髪を、悪戯に揺らしていく。

かもめがくるんと宙を舞った。

ほら。こんなに育ったんだよ、二人の子供たちは。

見せつけるように、佑夜と梓はただ微笑んで海原を見つめ続けた。

そつと手をつないだまま、ずつとずつと。

すると大海原の向こう側。

水平線がキラキラと輝き始める。

今暗黒の世界に、朝が訪れたのだ。

太陽はそこから顔を出し、二人を、世界を包んでいく。

花束は光の中、静かに水面を漂い続けていた。

ひかりの海

日常は何もなかったかのごとく、その日、その一瞬を刻み込んでいく。

『当たり前』

それもそのはずだ。

時は刻まなければ、先に進めない。

たった一人の不幸で、世界が変わるわけでもない。

何こともないのは、当たり前。

けれど当たり前は、本当は当たり前じゃないのだ。

日々変わりゆく物の中、たまにそれと似ているものがある。

ただそれだけのことが連なっただけで、人は当たり前と錯覚しているだけ。

そして大した変化のない日々を、変わり映えのない日常と読んでいるだけ。

そう。ただそれだけの話なんだ。

偶然の中にある平凡を、必然としているだけの……。

そしてそんな勘違いな当たり前の日々は、着実に過ぎていく。

季節は夏から、次第に秋の色を帯び始めていった。

一命を取り留めた将斗まさこは、その後すぐに高校を中退した。

体力の限界が、もう近づいていたからだ。

主治医からはこれからも入院生活が続くだろうことを告げられていた。

だったらいても、意味がない。

そして自分の気持ちに区切りをつけるために、将斗は潔く中退を決意した。

その日はやけに、空が蒼い日だった。

また、佑夜ゆいよは佑夜ゆいよで梓あすなに会ったことを家族に話した。

だからといって何かが変わったわけではない。  
今までどおり雪井家<sup>ゆきい</sup>で暮らしているし、それに誰もが納得してい  
た。

それは梓も同じだったのだろう。

確かな兄妹のつながりを得たからといって、何かがそうすぐに動  
くものでもないのだ。

人生なんて、そんなもんだ。

そして季節は夏から秋へ、その色を変えていった。

あの日。

あの追悼式のあつた日から、確かに。

「お前ただのバカだろ」

眉根を思いつきり寄せながら、将斗は呟いた。

「何度言えばその脳ミソに正確な情報が伝わるんですか？」

「だー、もう。だからこれはしょうがないんだっての」

そう言うつと佑夜は思い切り頭を抱え込む。

目の前に置かれているのは、忌々しき数学のプリントが一枚。

書かれているのは佑夜の文字よりも、どちらかといえば将斗の解  
説の方が多い。

つまりは、そういうことだ。

また数学ができていない、と。

「まったく、双子でも梓ちゃんとは大違いだね」

と嫌味を一つ言うと、将斗は「お兄ちゃん悲しいわ」と壮大なた

め息をついた。

なんでも梓は風紀委員で、しかも頭脳もかなりいい方らしい。

梓の名前を一度出した途端、将斗には即行バレたのだ。

他でもない。将斗も同風紀委員会に所属していたからなのだが。

「お前、卵割のあたりから人生やり直したら？」

「つかそれって、端からやり直せってことだよな。遠まわしに」

笑いながら言う将斗に、佑夜は間髪いれずに反論した。

「やっぱバレた？ と包み隠さず将斗は白状する。  
「やっぱバレます。 佑夜は引き攣った笑みを浮かべながらそう言っ  
た。」

その時扉が静かに開かれた。

そこには

「またからかわれているんだ、佑夜は」

花束を抱えた梓が一人たたずんでいる。

学校帰りなのは佑夜と一緒になのか、まだ夏服のセーラー服を身に纏っていた。

太陽の温かなにおいが、少しする。

そして梓は凶星を突かれていじける佑夜をよそに、すたすたと病室に足を踏み入れていった。

向かった先は、勿論将斗の元だ。

「先輩も佑夜なんかからかっている余裕があるなら、少しは休養とってください」

梓は喋りながら二人の隣まで行くと、そっと花瓶を手に取る。

バカにかまっっていると、時間が浪費されていきますよ。と、さらに棘のある言葉を付け加えてだが。

「うわあ、とうとう言い切ったよ。と将斗は苦笑を浮かべる。

ひでえ女。と佑夜は小声で呟いた。

酷くなんてありません。と梓は言い切った。

そして梓は手にした花を、花瓶に生けていく。

その中でやけに鮮やかな色を放つ花が、一つだけあった。

ついに蕾をつけ、まだ咲ききっていないそれ。

濃いオレンジ色のそれが。

先なんて長くはないかもしれない。

常に変わりゆく日々の中で、それは保障のされないことだ。

けど いや、だからこそ。

これからもたくさん作っていこうよ。

かけがえのない思い出を。  
たった一つの、思い出を。

窓から入ってきた風が、三人の髪を揺らしていく。  
そして風は、花々の香りと共に舞い踊り、どこか彼方へと消えて  
いった。

モントブレチア　すてきな思い出。  
彼らの思い出でも共に運びながら。

- f i n -

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6684b/>

---

ひかりの海

2009年6月27日19時15分発行